
Under a full moon

北川瑞稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Under a full moon

【NZコード】

N3211M

【作者名】

北川瑞稀

【あらすじ】

“やつと笑つたなって思ったから”

君が笑ってくれること。それが、僕の幸せ。

サイトからの再掲載です

ふと、ベランダでガタンと音がしたような気がして、目が覚めた。泥棒かもな…と、ほんやりとした頭が考えるが、眠気には負けてしまう。見に行かなきゃ、と思うのに、体はいうことをきかない。

ふたたび眠りの世界へ誘おうとしたその時、今度は本当に音が聞こえた。カーテンに遮られた月の光が、そのシルエットを映し出す。マントに、シルクハット…。こんな格好をするのは、今世間を騒がしている彼、くらいだろう。

眠たい目をこすりながら、もだもぞと布団から這い出た。ガラガラ、という音と共にベランダに面する窓を開けた。そこに居たのは、やっぱり彼。

「…快斗」

「よお、青子」

彼女は溜め息混じりに、彼をじっと睨んだ。

「…何してるのよ、天下の怪盗様が。こんなことしてると、正体バレちゃうわよ?」

彼は得意そうに笑つて答える。

「大丈夫だよ、撒いたし」

その笑顔にすこし反感を覚えた彼女は、何得意そうにしてるのよと言つてやろうと思ったが、やめた。言つたところで意味もない。

「…何しに来たの、仕事帰りに」

「いや、別に何も?」

その答えに、さりに反感を覚える。無意識に、キツい口調になっていた。

「何も用がないなら来ないでよ、睡眠の邪魔だから
…冷てーの、仮にも幼馴染みだるー？」

「問答無用。関係ないわよ」

彼のおどけた口調にも、今は苛々が募る。いつもなら、こつは思わないのに。

それを彼も感じ取ったのか、彼は訝しげに問う。

「…どうした、なんか今日はいつもより厳しいな。」

「うーん…？」

彼女はしばらく考えてから答えた。別にいつも通りだと思うのだけれど、ど。彼は納得しない顔をしつつも、「ふーん」と頷いた。二人を、沈黙が包む。その沈黙に、先に耐えきれなくなつたのは彼女だった。

「今日は、何を盗んだの？」

「ん？ああ、これ」

彼が笑いながら見せてくれたのは、紫がかつた色の宝石がついた指輪だった。

「きれー…」

「だろ？」

「うん」

彼女は盗んだ人間が自慢することじゃないでしょ、と突つ込むのも忘れて、その宝石に魅入つていた。

「…」れ、何ていう宝石？」

「んー…何だっけ？」

「覚えてないの？」

「忘れた」

思わずくすりと笑いがこぼれる。彼女のその笑顔を見て、彼は安心したように微笑む。

「…何よ

「ん？」

「何、笑ってるのよ」

ああ、そんなことか…と、彼はホッと息をつく。彼女が急に怒った顔をしたものだから、自分が何かしたかと思つてしまつた。

“やつと笑つたなつて思つたから”

そう言おうとしたが、やめた。ビラせまた、キザだ何だと言わるのは田に見えていいのだし。

「…快斗?…どうしたの?」

「ん?ああ、何でもねーよ」

彼は笑つて誤魔化す。

今までに、何回。いつもやつて誤魔化してきたのだろうか。今回のは小さなことだけれど、大きな嘘だって、たくさんついた。彼女が問うても、全て誤魔化した。彼女は自分が嘘をついていたことを知つていただろうし、自分が何をしていたのかも知つていただろう。何せ彼女のバックには、世間で名探偵と呼ばれる男の彼女がいるのだから。

「月…」

「え?」

「満月だね」

彼女にそう言われて空を仰ぐと、確かに満月が見える。

「で、満月がどうしたんだよ」

「…キッドが何かを盗むときは、いつも満月だよねって思つて…」

一瞬、ギクリとした。まさか“バンドラ”のことがバレたのではないか、と。

だがそこではなかつたようだ。ただ、そう思つただけ…らしい。

「満月つてさ、不思議だよね」

「…何が？」

「うーん…綺麗つていうか…。なんか引き寄せられるじゃなー」

彼女の言葉に、浅く頷く。

確かに、そうかもしない。ボレー彗星だつてきつと、この月の妖しさに惹かれてやつてくるのだ。まあ、ボレー彗星なんてものが本当に存在するのかはわからないのだが。

…そう。父・黒羽盗一を殺していた奴らの言つてこたことが、本当なのかどうかもわからない。パンドラが、どうこう仕組みで月に翳すと赤く光るのかもわからない。

全てがわからないことだらけ。手探りで進んでいくしかないのだ。

「…そろそろ帰つたほうがいいんじゃない?つていつか帰つて。寒いし。」

「おーおー、そりゃないだ奴…。つめてーの」
確かに彼女は今、本当に寒そうだ。自分は厚着をしているので、外の空気がどれくらい冷たいのかわからない。

彼女に風邪を引かせるのは嫌だな。そう想つてしまつたら、自分の次の行動は早かつた。

「じゃあな、また明日」

「うん、またね。おやすみなさい。」

彼女が笑顔で手を振つてくれている。その笑顔を背に、彼はベランダから飛び降りた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3211m/>

Under a full moon

2011年10月6日08時14分発行